

Title	高句麗の思出
Sub Title	
Author	藤田, 亮策(Fujita, Ryosaku)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.102(238)- 114(250)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことを待望する。

それにつけても、切に望みたいことは、學術における研究と啓蒙の連結である。學問を尊重するのはよいが、その遺風が妙に固まつてしまつて、讀んでかかされても何のことやら分らないような、いや、まるで讀もうにも讀めないような「難解」な「業績」ばかりが出版され、研究と啓蒙とが離ればなれ——と言ふより啓蒙のない状態が續くのはまことに困つたことである。啓蒙はもともと研究の豫備を兼ねるべきであつて、兩方を別々にするのはむだなことで

高句麗の思出

藤田亮策

ある。眞にすぐれた啓蒙ならば、當然そのまま研究のコースに直結される。明らかな知性と、優しい思いやりと、それから分りよい言葉——特にこの最後のものが守りにくいように思われる。しかし、どんなに複雑な事柄でも、ある程度まで平易な言葉を用いて言いあはらせるはずである。高い理論を低い言葉で書きあらわす心がけを専門家はまず養いたい。それが出來たあとで始めて、この本のような、いや、これよりましな、啓蒙と研究とを直結した書物が生まれ、人々の文化的水準が高められるであらう。

高句麗の歴史が、滿洲史よりも朝鮮史に於いて重く取扱はれて來たのは、その後半の都城が朝鮮の平壤に置かれてあり、半島の北半を領有して百濟・新羅と密接の交渉のあつたのによることいふまでもない。國史に所謂三韓の一つとして専ら朝鮮との交渉に就て高句麗を記述して來たことも大きな原因である。東洋史の教科書でさへも、單獨に高句麗の起原發達を説いたものがなく、新羅・百濟と併せて三國を並べてある。従つて高句麗は朝鮮の一國とのみ

考へて、滿洲人の建てた最初の王國であり滿洲の大半を領した大國なることを忘れて居る人が尠くない。周書以下の支那の正史も常に新羅・百濟と並記し、宋史・元史に至つては、王氏高麗の條に高句麗の後裔であると麗々しく取上げて、いかにも朝鮮の古國であるかの如き感を與へて居る。東方蕃夷の國として軽く扱つたのであらうが、後世を謬る基はそこにあるといへる。渤海國を朝鮮史から除外して顧みないのも妙な話である。國史に關係の深い渤海の日本路はどうしても朝鮮の咸鏡道でなくてはならず、朝鮮の北境はその領域に入つて居た。民族的にも文化的にも、渤海が高句麗の後身

であつて王氏高麗とは全く縁故のないことを知る人は少い。

高句麗は滿洲人によつて建てられた最初の國である。其領土は遼河以東の滿洲の全部と朝鮮の漢江以北の廣い地域とを含めて支那の周邊に出來た國としては強大な整つた國であつた。其文化は漢・晋・六朝の夫れをうけて獨自の發達を遂げ、今日に尙誇るべきものは墓制にも繪畫にも音樂にも遺されて居る。只文獻の餘りにも乏しいために歴史に空白が多いが、彼の廣開土境好大王碑の大文字によつて東方文化史上に大きな光を投げて居る。明治の中年に我國學者の滿鮮史研究に努力を捧げたものの多いのは全く此碑の爲めであり、之が日本に關する最古の確實の根本史料の一であつたことも原因して居る。然るに不幸にして高句麗遺蹟の全般的性格に就いては調査が行はれて居らず、好大王碑に就いてさへも根本的調査を遂げた人は少い。漸く此十年以來、滿洲全地域の平穩化と交通の便によつて、南北に確實の遺蹟が見出され、最初の都城通溝附近の古墳建築址の調査も緒についた時、終戦の混亂によつて全部放棄され、學者達の調査記録さへ大半失はれてしまつたことは洵に遺憾である。高句麗に關する從來の著録は決して少くなく、特に關野博士の「古蹟圖譜」第一・第二、「高句麗時代の遺蹟」圖版二冊・池内濱田兩博士の「通溝」上下二冊の如き世界に誇るべき大著作があり大小の論述亦乏しくない。然し乍ら何れも高句麗の歴史と文化とに關する局部的のもので、全般的の文化の變遷も社會狀態も知られて居たとは言ひ難い。遺蹟の分布さへ不分明の點が多く、朝鮮内の遺蹟の調査も最も遅れて居たのである。

然し大正初年以來、日本の學者による高句麗遺蹟の踏査と研究と

は大きな功績を擧げて居り、研究資金の不足と交通の危險とを顧みず、どうやら是迄にこぎつけたことは洵に多とせねばならぬ。特に最近十年間の新しい見聞と研究とが、未發表のままに遺されたものが少くなく、學者の間にさへ知られて居ないものがあり、互の發表に矛盾と誤謬の少くないのも無理からぬことである。

そこで學者達の從來の功勞を回顧すると共に、最近の知見の一端を拾つて高句麗文化研究の思出としたい。

二

高句麗の調査は明治三十八年秋の鳥居博士の滿洲通溝の遺蹟踏査が最初であつて、「南滿洲調査報告」の内に貴い記録が遺されて居る。所謂好大王墓は、鳥居博士は之を將軍墓として居られるが、原狀を略圖に示され、其南面一丁餘の點に建築址と礎石・文様埴とを認めて居られるのは興味深いことである。明治四十年に佛蘭西のシヤバンヌ教授が同じ遺蹟を調査され、「通報」誌上に所見を發表すると共に、有名な「北支那考古圖録」に圖版を入れたことによつて、歐米人の注目を惹くこととなつた。明治四十二年に荻野・今西兩博士は朝鮮平壤に於て高句麗都城の址を踏査し、江東の漢王墓なる大古墳の所在を報告されたのが、朝鮮に於ける高句麗遺蹟の學界に知られた最初である。明治四十四年秋に至り、關野博士は漢王墓を發掘して初めて高句麗古墳の構造を明にし、江西三墓里の古墳を初として平壤附近の高句麗墳墓を調査し、習大正元年秋には江西古墳の發掘によつて其二墓に驚くべき鮮麗な壁畫のあることを確めて學界を驚かし、爾後平壤の周邊に於ける十墓に餘る壁畫古墳を

得る端緒を開いたのである。尤も江西の壁畫古墳の存在は曾て同地の守備隊に勤務した太田天洋畫伯の報告に基くもので、同氏の上官が里人の言を信じて之を發掘實見したものだといふ。大正元年十二月から二年の正月にかけて、鳥居博士は朝鮮總督府の史料蒐集の爲めの調査として滿洲の懷仁（桓仁）・通化・通溝（輯安）の地帯を踏査し、將軍塚・大王墓・千秋塚・好大王碑を始め、輯安縣城・山城子山城・懷仁五如山城等をも詳細に比較考査し、四ツ切寫眞數十枚に撮影されたことは劃期的の事業であつた。又前年發見の毋丘儉碑の斷片をもとめて小板石嶺の險を越し昔時の高句麗往還を突破し、懷仁・通化附近は元より、遠く松花江上流地方の高句麗古墳群の存在を記録し、間島龍井村の古墳群に注意したのも此時である。只不幸にして調査の略報告が總督府に提出されたのみで遂に發表に至らず、學界に報告されることの少なかつたのは遺憾であつた。

大正二年秋、關野博士は今西龍・栗山俊一・谷井濟一の三學士と共に通溝附近の遺蹟の詳細な調査に當り、大古墳の實測の外に、三室塚以下の壁畫古墳の所在を明にし、記録・寫眞・實測圖并に壁畫の見取圖等によつて、始めて通溝遺蹟の實際が學界に紹介されたのである。大正五年に至り、關野博士の率ゐる朝鮮總督府の調査隊は、平壤の東方に當る大聖山城下の古墳群を調査し、魯山里壁畫古墳以下の發見が學界を賑はした。

翌六年には關野博士一行は滿洲楡樹林子附近を踏査し、山城を求めて得られず古墳群を調査し、更に朝鮮側の渭原・楚山・雲山等の高句麗古墳を探査し、其分布區域を明にした。特に雲山に於ける大

石塚の發掘によつて綠褐釉壺・金銅鳳凰・鐵焜爐等を得たことは遺物の少い高句麗遺蹟に珍らしいことであつた。

大正七年には黑板博士の通溝調査があり、特に好大王碑の基脚の發掘と擬榫を取去つての碑面の好拓は學界を裨益する所少くなかつた。之を以て高句麗遺蹟の積極的調査は一應打切られて壁畫古墳の保護に關心を寄するに止まつた。滿洲にあつても東邊道の僻遠地に調査の手を延ばすが如きことは、治安の關係上不可能であつた。

昭和十年に至り滿鮮共に再び高句麗遺蹟が學界に浮び出ることと成り、滿洲では新壁畫の續出と古墳の構造に關する精密の研究が取上げられ、朝鮮にあつては各地域の古墳の發掘と寺址・殿址等に主力を注いだ。

滿洲に於ては古文化の調査と保存に關心が寄せられ、昭和十年五月伊藤視學官の通溝に於ける新壁畫古墳の發見報告は文教方面を刺戟した。即ち日滿文化協會と滿洲文教部とでは關野博士を首班とする調査團を計畫したのであるが、博士の急逝によつて濱田・池内兩博士を指導者として同年秋に第一回の調査が行はれた。治安の關係上主として新發見の舞踊塚・角觥塚の壁畫古墳に重きを置き、將軍塚・大王陵・千秋塚・好大王碑・山城子山城等も踏査の上寫眞撮影に終始した。翌年秋に第二回の調査が行はれ、實測・撮影・記録の三方面から調査が進められ、羊魚頭の環文塚・牟頭墓の再發掘・輯安縣城の實測等も主要の作業の一つに加へられた。昭和十二年には更めて文教部の事業として輯安縣城東門外の大古墳群の調査を開始し、黒田源次博士指揮して第十二號墳・四神塚・

第十七號墳等の發掘によつて絢爛たる壁畫は續々發見され、高句麗

には稀なる遺物さへも現はれて、學界は大きな衝動をうけた。特に十七號墳の完全なる構造と盛上げ彩色の驚くべき豐溢な壁畫とは高句麗文化の最高頂を示して居る。同じ年に山田文英氏によつて輯安古墳群分布圖の作られたことは特筆すべく、輯安・梅河口間の鐵道敷設に伴ふ古墳群破壊を救ふための豫備調査であつた。昭和十三年には朝鮮古蹟研究會の事業の一として上記の如山下の古墳群の精密な分布實測が施行され、五塊墳其他の大古墳の詳細實測も行はれ、翌年に繼續して將軍塚・大王陵・千秋塚等の大石塚の構造と陪塚との關係が明にされた。昭和十五年には匪賊の包圍中にも拘らず、小場恒吉氏は四神塚・第十七號墳・第十二號墳の壁畫の模寫に精進し、又鐵道工事によつて破壊される大小古墳の調査も行はれた。筆者は昭和十六年から十八年に至る高句麗祭を利用して、通溝周邊の大小古墳の實測と山城子山城、輯安縣城等の略測に従事した。昭和十八年五月の通化・桓仁附近の高句麗古墳の調査は、鳥居博士の報告の缺を補ふ爲めであつたが、時節柄不完全のものに過ぎなかつた。

平壤附近にあつても昭和十年から高句麗遺蹟の新しい知見が注目され、朝鮮古蹟研究會は昭和十一年から十三年までに柴足面、大寶面等の古墳群を發掘し、晩達面の古墳からは陶器・耳飾等の發見があつた。又三ヶ處の寺址の調査によつて高句麗の堂塔の配置の特異性を知ることが出來、此方面に新分野を開くこととなつた。昭和十六年の東明王陵附近の新壁畫古墳發見は、輯安の夫れと別趣の完全な美術品であり、玉蟲嵌装の金銅飾は高句麗の最も優れた工藝

品の一である。

斯の如くにして終戦時まで惡條件の下にかつがつに繼續された此方面の調査は、何れも學術的な良い結果を擧げて漸く高句麗文化の全貌を明にし得るかと思はれるに至つたが、殆ど報告書の發表を見ることなくして記録の大半の失はれたことは遺憾である。只朝鮮總督府博物館に置かれたもののみは完全に保存され、やがて學界に報告される日のあることを期待するものであり、之が日本の學者の負ふた借財の大なるものの一たることを自覺したい。而かも如上の遺蹟の調査が日本人によつて常に良心的に行はれ、其發見の遺蹟と遺物とが、完全に保護されて來たことをせめてもの慰とし又大きな誇としたい。平壤の博物館も、どうやら無事に引繼がれて居ることを小泉館長の消息によつて知り意を安じて居るが、滿洲に於け壁畫古墳其他の状態につきては甚だ憂慮して居る。

三

高句麗の文化の遺物の今日に知られたものは必ずしも多くない。山城と都城と僅か乍の建築址とは早く知られて居たが、寺址につきては新しい知見である。最も著しいものは其墓制と墓室内の壁畫とであつて、古墳内の伴葬遺物も十年以來漸く性質を明にするこゝとが出来るに至つた。佛像并に工藝品も次第に數を増し、金石文は甚だ少いが文獻の缺を補うに足るべき重要なもののみである。

山城は新羅・百濟・任那諸國にも共通の城寨であつて、而かも他に類例を見ない形式で、山上から山麓にかけて土壁又は石壘を繞らして必ず山下に水門を設け、城中に池又は溪流を置くのを常例とす

る。滿洲に於ける撫順・海城・山城鎮・吉林の龍潭・延吉の城子山、朝鮮にあつては平壤の大聖山・龍岡の黃龍・寧邊・泰川籠吾里山・鳳山の鶴麟等の山城は其典型的のもので、唐の大軍をも辟易させた險峻さは史上に著名である。桓仁の五如山城・九連城東の山城の如きは絶壁を利用して山頂に設けられ、而かも水門と池水とを缺いては居ない。此形式の山城が何れに起原を持つかを今確め難いが、山野を跋涉し漁獵を事とした滿洲族に祖形があるのではないかと推定され、朝鮮にあつては南に下るに従つて多少形式に異動を見る。天智天皇の時築かれた對馬の金田城・築紫の大野城・基山城等が此形式さながらであることいふまでもない。

山城の外に平城のあつたことは通溝の輯安縣城の基址・間島龍井村の東興城・同渾春の高麗城等に適例を見るが、平壤の城郭は稍小高い牡丹臺と平川里の平衍地とを連結して中間形式である。吉林の龍潭山城の如く山城下に平城の土城を附加したのもある。此事實は山下に平常の居住地があり、一旦事あれば山城にたて籠る習慣を示して居る。城内の建築は長大にして倉庫又は兵舎と考へられるものが多く、同じく高句麗瓦の散在を見ても、城内の大建築には瓦當の飾が少く、殿堂の豪壯の構造が考へられない。

嘗て學術雜誌上に盛に論議された通溝城と山城子との關係の如きも、實地の調査によらぬ空論が多く、果して何れを是とすべきかに多くの人は迷ふたものである。筆者の考察によれば、輯安縣城の基址が高句麗の構築たること誤なく、其東・北・西の三面は今も大石の雉城の痕を存し、南方は陥没して居るが四周通じて濠を繞らしたと明で、北方には二重の溝が残つて居る。現在の壘石は遼金代

に一旦改築されたものらしく、是を以て高句麗時代の遺構とすることに同意し兼ねる。甚だ興味あることは縣城の東門を去る五十米餘にして大建築址のあることで、其雄大なる礎石の配列と赭色瓦の豊富なるとは縣城内の比ではなく、昭和十四年頃掘り出された瓦當だけでも夥しい數に上つて居る。更に東すること一料にして東臺子の建築址があり、其礎石と瓦とは早く鳥居博士の注意する所であり、古蹟圖譜にも圖示されて居る。然るに北半籽餘にて山麓の大古墳の前面にも建築址があり、以上の三者鼎立して無關係のものと思はれない。少くとも東門外の大建築は廻廊を有する雄大な構造で、之を宮殿に擬するより外に考へられないものである。平壤の牡丹臺と同一面積の倭小の輯安縣城の地を以て、高句麗王國の居城と考へるよりも、通溝平野の全面を以て之に充て、殿閣は東門外にあつたとして差支ないと思ふ。尤も輯安縣城を以て初期の居城と考へ、或は宮殿を之に擬することは出来るが、居民の住宅が縣城と大王陵との中間に擴がつて居たことは礎石・瓦片・陶土器の夥しい包含によつて確められる。即ち通溝平野其ものが高句麗中期の都城で、山城子は其城寨であつたと言へる。我が平京城或は平安京の如く、居城の周圍に壘壁を必要としない天然の要害たることは、此處に臨む人の何人も肯定する所であらう。後期の都城たる平壤城は廣大にして平地に街衢を設け、其方形の條坊の迹が箕子の井田と呼ばれて保存されたことは人の知る所である。中央より稍東は丘阜によつて牡丹臺の高地に連り、此處に宮殿堂閣の散在したことは礎址によつて明である。今平安南道廳の基址、平壤神社前の門址の如き好例であり、瓦陶の破片も夥しい。城廓は截石を積み内に土石

を敲き込み、大同江岸は護岸を兼ねて特に嚴重であつた。即ち唐制によつて街衢を區劃し、一方に殿閣を設けて山城と平城との中間形式のものを設けて保護したのである。東方に大聖山城があり、西に龍岡の黃龍山城はあつても、輯安の如き天然の要害に缺くる所あるが爲めと思へる。

牡丹臺の東に連る清岩里土城内の寺址は、八角塔址と金堂址とを中軸にして廻廊を繞らし、南に門を開き北に堂閣を連ねて興味ある構造である。又平原郡五里の寺址の塔址には多數の型による陶像を發見し、高句麗時代の佛像の形式を見る好標本である。外に陶製の泥像二個が發見されて居るが、何れも北朝風の傳來を思はせる力強い褶線を示し、高句麗の佛教藝術の據る所を明にして居る。

四

高句麗の墓制に就ては筆者曾て之を論じたことがあり、梅原博士亦「朝鮮古代の墓制」なる新著に詳説してあるので、敢て贅言を挿む必要を認めないが、専門の考古學者の間にも尙誤謬と曲解とを繰り返すものがあるので、更めて、卑見の概要を擧げ、高句麗を偲ぶよすがとする。

古墳の分布は未だ完全に調査されて居ないが、山城平城等の所在と略々一致して居り、遼河以東の滿洲の各地と、臨津江以北の朝鮮の北半部とに見られる。滿洲にては北は間島の龍井村附近に小形の土塚と石塚五六十基の群集があり、何れも方形で土塚は横穴式石室を持ち石塚は三乃至五段の高からぬ階段ピラミット形である。五道溝附近の古墳群も同性質らしく、渤海の墓と言はれて來て居る

が高句麗墓の地方型ではないかと思ふ。吉林の東方、龍潭山城の西に當り小形の方形土塚が十數基あり、間島の夫れと共に横穴式石室は川石を積み大石板を天井としたもので、未だ折上天井も隅重ねの特異の天井構造も見られぬことを注目すべきである。後者の傍には高句麗瓦を豊富に有する土城と廣範圍に亙る住居址とがある、又古墳内の陶器片・博片によつても高句麗のものたることが疑ない。南方海城・撫順方面の古墳につきては筆者は知見を持たないが、老城・興京方面の古墳群が、大小の土墳であることは稻葉君山博士等の調査によつて知られる。小遼水の土流たる老城・興京が撫順・遼陽と桓仁・通化・通溝方面の古代の往還なることは學界に知られて居る。松花江の上流地方の海龍・梅河口・山城鎮方面の古墳群につきては大正元年の鳥居博士の報告に略説されてあり、大小の土塚が山東人の侵出と伐採開墾により、急速に破壊されて居ることを指摘し、横穴式石室なる外に特徴は述べて居られない。鴨綠江の支流修佳江の流域は、高句麗族の最初の根據地の一と考へられて史家の縦横論議を経たものであるが、鳥居博士・黒田源次博士の踏査の外に専門學者の調査に漏れて居る。然し乍ら鳥居博士は朝鮮の楚山對岸の古墳群から楡樹林子・桓仁・五如山下・通化及び通化と桓仁間の古墳群につき見聞を記録され、特に五如山下の古墳群には石塚と土塚とあり、石塚の方形なることを認めて居られる。筆者は昭和十八年夏の踏査によつて略ぼ鳥居博士の報告を肯定することが出來たが、只古墳の大半は耕作されて影を失ひ、僅に數基宛の群在を認めるに過ぎなかつた。又土塚は方形で横穴式石室の平天井なことが知られ、遺物に就ては知る所がなかつた。翌年滿鐵の調査

團として調査された三上次男氏の見聞記録に、五如山下に古墳を見ないところはあるは誤で、西方よりする唯一の登道の下には大小數基の塚の基址があり、道傍には草阜の内に原形の偲ばれるものもある。土墳は悉く破壊されて石室の蓋石はダム建設事務所の宿舎等の内に使用され、完全な土塚は僅に西北麓に二三基と東方河を越して平地に五六基が見られるだけである。五如山城に築壘の址も高句麗の瓦片も見られないとする點と共に、三上氏の訂正を望むものである。

桓仁の南方二里餘の修佳江に臨む米倉子の丘には堂々たる古墳群が見られる。其主墳と思はるる土塚は高さ七米、方四十米に及ぶ大方墳で、南面に盜掘孔があり美しい壁畫が描かれて居ると縣志は言ふ。石室の構造を明にし得ないのは遺憾であるが、其の東に近く二基の陪塚が並列し、何れも横口式の平石天井の方墳である。主墳の南西三百米に古廟を中心に十基餘の大小の方形土塚があり、何れも横穴式石室で大石を並べて天井とし、羨道を有し棺臺の有無は明でない。此ことは修佳江岸の土塚に南朝鮮併に日本の古墳と同じい横穴式石室の通例なることを教へるもので、通溝附近の無數の小型の土塚・石塚が同形式なることと共に注目すべき事實である。又桓仁附近に會て多數に散在した古墳群には石塚と土塚とあつて地域的に多少異なつて居ても其間に區別は認められず、何れも方形を取つて居たことを知るべきである。只土塚の方が多かつたことを鳥居博士は認めて居る。

通溝は鴨綠江中流の大盆地で、江に従つて東北東から南南西に約十料餘、幅は一料餘で滿洲側に廣く朝鮮側には斷岸が多い。通溝とは山城子の豁谷から來る一支流鷄兒江の本名で、輯安縣城は其合流

點に近く通溝に接して作られて居る。縣城を中心として古墳群は四方の山裾・谷々に營まれ、略八區に分けて考へられる。東方第一區羊魚頭は滿浦鎮の對岸平地にあつて山裾に環文塚・牟頭墓塚を中心とし數十基の土塚がある。第二區は東崗の東に高い丘端の一群で、臨江墳なる方七十米の大石塚を中心に其陪塚群と大小の土墳・石塚が山上に群在して居る。第三區は東崗の大王陵と其背後に續く石塚・土塚の古墳群・第四區は將軍塚と其背面の陪塚群併びに土口子に至る古墳群で、比較的大形の土塚がある。第四區は土口子峯から縣城の背後に及ぶ如山山裾の三料に近い大古墳群で、土・石大小雜居、數千基に及んで居る。梅輯線の鐵路が此中央を貫通して工事の際數百基を失つたが、全體から見て大勢に關係は無い。此鐵路の開鑿に當つては文教部の山田文英氏の苦心折衝洵に感謝すべきものがあり、滿鐵の當事者亦筆者等の言を良く容れられて路線を縮少し變更して重要な古墳を悉く避けて行つた努力は多とすべきである。日本の國內では絶對不可能かと思はれることが、滿洲にあつては經費も日子も無視して速決快行寔にすらすらと行はれたのである。大陸に働く人々の熱心さと恬淡さの爲めであらうが、當事者の文化施設に對する熱意も忘れてはならない。第四區の上層急峻の部分には石塚が多く、次の傾斜部には土塚と石塚と相半ばし、低地に近い緩傾斜面には大土塚と大石塚とがあり、丘陵端の如き好位置には大古墳が雄視して居る。數の多く巨大なるものが多いこと此區を第一とする。第五區は鷄兒江即ち通溝の兩岸で、山城子山城下に至つて巨大なものが連互し、更に北方豁谷にも及んで居る。土・石混交は他と同様である。第六區は縣城の西南の山裾一帯で、

大石塚と小土塚とがある。第七區は麻仙溝の鴨綠本流に合流する附近であつて、千秋塚と其陪塚を南端として溝の兩岸に連る。土・石混交し石塚に目立つたものがあり小墳は少ない。第八區は麻仙溝の西方山裾の西大塚の大石塚と其陪塚の土墳・石塚群で、其數は多くない。更に對岸朝鮮側にも小形古墳群があり、高山鎮と滿浦鎮との中間、滿浦鎮の東北等に今も小數の群在を見ることが出来る、鴨綠江に沿うて上流臨江縣に至る迄の各小盆地にも古墳の點在するのが見られ、下流の謂原・楚山附近にも小古墳が散在し、今遺つて居るものは大半石塚である。

以上通溝を中心とした古墳群に於いて特殊の高句麗の墓制の成立を見、又壁畫のすばらしい美しさと完全の裝飾藝術の發達を知ることが出来る。茲には簡單に個條書にして其特性を示し、筆者個人の意見を書くに止める。

(イ) 高句麗の古墳の外形は今迄知り得た範圍内では滿洲にあつては悉く方形である。詳しく言へば、四周は石塚にあつては方形で、土塚にあつては三味線胴式である。後者がはたして本來の形か或は盛土の關係上出來た自然の成形かは知るべき資料がない。上頂は截頭形で中央が小高い程度であることは石を頂いた實例から推定出来る。四方の稜線は緩やかな曲線であつて直線ではなく、石塚でも同様であることは將軍塚が證據立ててくれる。之は土塚成立の自然の形であり、南部朝鮮の圓形墳にも常に見る所である。方形墳の形式が支那本土の古制に做つたことは樂浪郡・遼東郡の漢代古墳に手近かに見られるし、又秦漢の帝陵の截頭方臺形なることから考へられる。然し高句麗の古墳が悉く方形を採るに至つたこ

とは由來する所の古いことが思はれ、梅原博士も指摘して居られる様に、遼東半島に於ける石器時代末期の方形石塚の盛行に思及ぶのである。鳥居博士が「南滿洲調査報告」に圓錐形の石塚を圖示された石劍出土の古墳が、悉く方形石塚の連續形であることを知つた昭和十六年秋に於て、筆者も等しく此感を深くしたのであつた。滿洲の濊貊族の間への漢文化の影響は、斯くも深く早いものであつた。戰國末期の明刀錢が遼東から輿地の鴨綠江中流にまで及び、更に其支流に沿うて江界・寧遠・寧邊等の朝鮮の山間地帯に達したことは、此謎に幾分の解決を與へてくれるものと思ふ。

(ロ) 高句麗の庶民階級の墓が如何なるものであるかは尙殘された問題であるが、中間階級と思はれるものの墳墓、即ち最も數の多い小塚も方形の基址であつて、其石室は所謂横穴式の美道のあるもので、天井は板石を並べたものであることは一致して居る。小形墳にも稀に隅重ねの三角持送天井は認められるが、滿洲にては通溝附近に、朝鮮にあつては平壤附近に見られるのみである。石塚にあつては多く平天井である。側壁は塊石を積み上げ又は切石を重ねて多少持送式に天井を狭めたものもあるが、板石を四方に立てた箱式のものも少くない。朝鮮龍岡の黄山里に見る板石の箱式石室を有する小墳群も同一系統である。之によつて高句麗の古墳本來の形式は、世界に共通に見られる横穴式石室墳で、早く漢族の方形墳の影響をうけて方臺形の形式が一般化したものである。延吉小營子の石器時代の古墳に見られる様な、板石の箱式石室も力強く影響して塊石積と兩種が並存して居る。只石塚即ち積石塚が沙漠を経て西比利亞南部又は南露・西亞細亞に見られるケールンと關係がある

のか、或は又遼東半島の方形積石塚に見る如く山東半島方面との連繋が考へられるものか、今斷定すべき階段に至つて居ない。何れにしても、高句麗王國成立の頃には既に以上の各種が形式化して居たことを知るのみである。

(ハ) 雄大な大古墳は王候貴族又は地方族長の墳墓と考へられるが、之が常に大小の古墳群の内に聳えて居ることは、部族制度の整備した濊貊族には當然のことである。南部朝鮮に於ても、日本の上古にあつても同じことが言へる。従つて古墳の所在と部族の關係が考へられ、大部族・小部族、王統と其他のことも推し得る譯である。是等大古墳も亦石塚と土塚とがあつて、土塚は土塚群、石塚は石塚群と分れ、或は五塊墳と其東の大土塚群、三室塚の北に當る石塚列の如く、多少兩者の群の異なる區域を示すものもあるが、一般的には混在して部族による別も時代による前後も考へられぬのが實狀である。時には大石塚の陪塚に土塚群があり、大土塚と石塚とが隣接して一列を作ることもある。従つて「通溝」によつて推定された様に、石塚を稍古く、土塚が後期に多いとのみ斷定することも出来ない。桓仁附近の古墳の形式を證據とすることは元より誤である。只はつきりと言ひ得ることは、壁畫古墳を持つ大土塚の多くが、壁畫の手法様式等から比較的新しいもののあることである。平壤遷都後の古墳に大石塚の少いことは、必ずしも時代の特質か否かは明でないが、事實として認めねばならず、大土塚に構造の變化に富んだものが多く見られることも否定出来ない。

(ニ) 王陵とでもいふべき大陵は石塚・土塚の何れなるに拘らず特殊の墓制を採用して居る。墓の四周十米突乃至三十米を限つ

て墓域を定め、川石を敷き或は境界に石を並べてある。大王陵・將軍塚・五塊墳・東大塚(五塊墳の東の大土塚)・北大塚(縣城の北方山裾の二大墳)・千秋塚・西大塚(千秋塚の西一籽半の丘上大石塚)・臨江墳等が好例である。右の内大王陵には周圍に土壘を築き、南面中央に門があつた。又以上の大陵には悉く背面又は兩側面に並列した一列乃至二列の陪塚群がある。此陪塚群は必ず墓域の範圍内にあつて略相等しい大きさである。陪塚の並列は他の大形墳にも屢見られる。朝鮮江東の漢王墓には、墓域の敷石の外に南面中央に一條の敷石あり參道となつて居る。大王陵の南面にも此ものが見られ、更に正面門址から二百米にして建築址があり、方形並に八角造出の大礎石と厚手の長方墳とがある。墓祭に關係あるものではあるまいか。將軍塚の南西面、北大塚の前面の建築址と關係があるやうに思へる。又五塊墳の内四基の頂上には方形に石を敷き其二基には中央に大石を置き、東大塚の頂上又石敷が認められ、北大塚の二基の頂上は方形に石灰と川石とで固めてある。將軍塚の頂上の添喰固めと同じく、頂上を固めて方臺狀を成した確證である。斯の如き墓制は高句麗王國の確立と共に成就したものと考へられ、好大王陵碑に、陵墓の守直烟戸を置いたことと共に、當時に於て既に嚴然たる形式の成立も肯定出来る。

(ホ) 將軍塚・同陪塚・大王陵の三大石塚が、墳底より遙に高い頂上近くに横穴式石室を据えて居ることから、石塚の墓室の構造を土塚の夫れと全く別のものと考へるのは誤である。石塚にして持送式の穹窿天井を持ち又三角持送天井のものも少數乍ら如山下の古墳群内に見られ、又地表面に石室を築き周圍に石をつめて積石塚

を築造した例は少からず見られる。梅輯線の鐵路工事は此點に於て良い資料を澤山提供してくれた。石室墳に壁畫の痕迹のあるものは第十二號壁畫古墳附近にもあつた。只不幸にして上記の三大石塚の外には原形の見られる石塚は少く、石室の完全のものが得られないので此三者がいつも引例されるのである。雄大な石材を築き上げての大事事なので、幽室の構造に制限をうけ、將軍塚・大王陵の如き高い場處に彼の如き嚴重の墓室を作らざるを得なかつたものと推測される。其點土塚は構造に自由であつて、彼の様な自在の形式が生れたのであらう。只高句麗の最盛期に既に石塚の規模も様式も定められ盛行したことが考へられ、大土塚の自由の様式は、更に永く後世まで盛行したと言へるのである。

(へ) 土塚の石室、稀には石塚の石室に於ては石室の四隅に三角の持送を作つて小さな四角形を作り、三角持送を其上に重ねて最後に大石を置くといふ特殊の天井が作られて居る。此の形式は全く高句麗古墳のみに見る特異のもので、構造巧妙にして自然の崩壞を見ることは少い。漢代の穹窿天井に優る巧致さと言へる。此形式は南露黒海沿岸のスキタイの古墳にも見られ、中央亞細亞の唐代の窟寺の天井に見るもので、西方の構法が高句麗に傳へられたと考へられるが未だ支那本土に其技法の使用を見て居ない。滿洲及び蒙古の古族に對する直接西方の文物の影響を考ふべき興味ある事實である。土塚には右の外にも四方持送を重ね、八角十角の持送天井による一種の穹窿天井を成すものがあり、又四阿式天井、料栱式天井等變化に富み、木造建築との關連を思はせるものもある。壁畫古墳の四隅の柱・料栱・墓股の圖樣と共に當時の建築を偲ぶべき資料

と言へる。

五

朝鮮内にあつては鴨綠江岸より載寧江岸に至る迄各地に高句麗古墳の分布を見、北は咸鏡北道の會寧附近から咸興平野・高原・安邊に僅かながら之をたどることが出来る。特に平安南道の大同郡・順川郡・江西郡・龍岡郡・平原郡・中和郡に著しい濃密の分布を見、大同の柴足面・江西の大寶面・龍岡の大代面のものを代表的と考へる。南端は載寧江支流の鳳山郡と臨津江沿岸に夫かと思はれるものがあるのみで、漢江畔には遂に一基をも見ない。

石塚は平安北道楚山・渭原・江界・雲山・龜城・泰川及び平安南道の大同郡を除いては殆ど見られず、他の地方は悉く土塚なることに注目すべきである。而かも雲山郡のものを最大とし、大同の大聖山城下に多數に見られた小石塚は今大半を失つてしまつた。龜城・泰川等の石塚も著しいものは見られない。以上によつて高句麗都城南遷後には土塚の盛行したことが言へる。何が故に雲山の山中にのみ大石塚のあるかは遽に説明出来ない。平壤周圍に最も濃密の古墳の分布を見せて居るのは都城周邊として當然で、特に大同の柴足面・江西の江西面・順川の北倉面・龍岡の大代面等には華麗な壁畫古墳を有する大土塚があり、中和の東明王陵と併せて十二基を數へるに至つたのは、高句麗文化の高潮を物語るものと言へる。特に江西三墓里の二基は早く發見されて其壁畫の手法は優れ、東明王陵の夫れは最も新らしい發見で其手法は新らしく鮮麗自在である。

朝鮮内にあつても四方に散在する多數の小形古墳は横穴式石室で板石天井を覆ひ、最も原始的形式を保持して居る。石塚の完形のものは一も見られず、従つて其石室構造の特徴を知ることが出来な
いが、土塚の大中墳は三角持送天井又は四方持送天井で、四壁は截石又は積石の石灰塗なること滿洲の夫と異ならない。而かも比較的
小形の古墳に至る迄持送天井の手法の示されて居るもののあるのは、此種の構造が既に一般化されたことを物語つて居る。又石室
の内面を美しく漆喰塗にして壁畫の描かれて居ないものが多いこと
とも注意すべきで、此種墓制の普遍化と考へられる。甚だ興味深い
ことは、新羅・百濟の古墳に漢族の模倣かと思はれる木槨又は木棺
の使用が影響し乍ら、高句麗の此特殊の墓制が遂に作用して居ない
點である。百濟・伽耶諸國に對する一部の方墳の形式は、南方支那
からの傳來で、高句麗のものでも樂浪からの影響でもないと言は
れて居る。新羅・百濟・伽耶共に、一般的には圓塚式の古式の風
を固守し、稀に箱式棺の傳統もあるが、横穴式の平天井石槨が行は
れて居たのである。

古墳は民族の信仰と離れ難い關係にあり、従つて祭祀と墓制とは
各民族に特色と固有性とを與へて居る。高句麗人の信仰がシヤマ
ニズムに終始し彼等の天降子孫説を固執し乍ら、其内に多分の漢族
の信仰の織り込まれて居ることは古墳の壁畫にも伺はれる。

六

古墳の外には高句麗の遺産は洵に乏しい。而かも古墳の大半は
早い時代に盜掠を蒙つて殆ど空洞に等しく、開口に容易な土墳は勿

論のこと、石塚でも悉く破壊されて今見得るものは其殘骸と基
址とに過ぎない。三百年前に見た朝鮮人の記録によるに、通溝の大
王陵・將軍塚さへ今日の慘狀と同様であつたらしい。滿洲と等し
く朝鮮内のもも例外なく破壊され盜掠されて居る。従つて高句
麗の文物に至つては壁畫の手法・畫題・風俗圖による外知るべき
ものは少かつたが、最近十年來漸く滿洲にあつても朝鮮に於ても僅
か乍らの遺物を見ることが出来た。

日用器具としての土陶器は二種類のものが指摘出来る。其一は
樂浪の古墳に見ると同じい砂礫まぢりの粗硬の質の丸壺類と良粘
土による灰色の壺類で、何れも焼成度の低いものである。他の一は
所謂祝部焼又は新羅焼に見られる硬質の陶器であつて、表面は線紋
による裝飾なく、壺・鉢・皿等の僅かの種類に限られて居る。いふ
までもなく古い漢式陶と南北朝に入つてからの南方の硬質陶の兩
様の影響であり、遂に高句麗らしい特質を出すまでに發達を見せず
其種類も壺類に限られて居る。褐色釉又は黃褐釉の壺が滿洲にて
も朝鮮に於ても見出されて居るが、又南北朝から唐代にかけての
釉陶の模倣品で、當時にあつては最も優れた貴重な陶器であつた
らう。瓦埴に至つては特殊の發達を見せ、其文様のみからでも高句
麗人の大陸文化咀嚼の十分であつたことが知られるが、是等に就て
は圖録他にいくらか紹介されて居るので之を省略する。

樂浪人の文化の内でも陶器の發達が最も見劣りするのであるが、
夫れは木器と漆器の日用化と發達とに原因し、高句麗人の陶器に見
るべきものの少ないのも同じ理由であるらしく、西域地方の木器の發
達が之を傍證して居る。但し高句麗に漆器のあつたことは通溝第

十七號墳の木漆棺片に知られるのみで、發達の程度は知ることが出来る。

金・銀・銅製品、特に銅容器の發達は或程度推定出来るが其出土例も僅少である。只昭和二十一年春に朝鮮慶州に於ける古新羅の一積石土塚内から、高句麗の廣開土境好大王の名を冠した銘器の新發見は、種々の點に於て學界に問題を供する興味ある事實である。

金製又は鍍金銀の耳飾が上代日本及び南部朝鮮に通じての特殊の工藝品たることは、曾て筆者が詳細に採録して學界に報告したことがある。而かも漢江畔の百濟の遺蹟まで之をたどり得て其北に及ばなかつたものである。然るに昭和十年以後、咸鏡南道咸興附近、平安北道寧邊邑附近、平安南道晚達面等から多數の金裝耳飾が發見され、其形は粗野ではあるが南部朝鮮並に日本の古墳出土品に全く同一で、金銀珠玉を以て身體を飾ることを好むと漢人を嘆ぜしめた東方の人々に共通の風俗を如實に知り得たのは愉快である。只一つ、彼の勾玉飾が高句麗にのみ見出されないのは、無かつたものと斷定することに筆者は躊躇するのである。従つて、勾玉が日本に發達して南部朝鮮に傳播したかに解釋する濱田・梅原兩博士の説を筆者は支持出来ない。

高句麗文化の代表ともいふべき古墳の壁畫につきては、餘りに思出が多く書くべきことが山積して居るので之を他の機會に譲ることとする。只一言、是等の壁畫が手法・題材共に漢土に學んだことは誤ないが、其筆致に、其文様の省略方法に、又眞に逼つた高句麗人の風俗人物像に、畫家は高句麗人でなければならず、例へ漢人であ

るとするも子孫相嗣いだ品人でなくてはならぬと信ずるのである。明確な北魏式泥范佛像にも既に認められる様に、高句麗人は高句麗人らしい藝術を作り上げて本國のものに對する特色を示して居るのである。其點は新羅の佛教藝術に百濟の夫れに又奈良藝術に於いても、支那本土の模倣にして模倣を脱した特徴と氣分とを十分に味ひ得るのであつて、同じことが高句麗の藝術にも考へられるからである。通溝第十七號墳の絢爛にして奔放自在なあの壁畫は、極彩色の盛上げにて朱・綠・藍・紺・紫・黄・赭・群青・白群を自由に使用し、而かも人神に眼玉を嵌し四方に金銅の飾金具を張るといふ華麗溢美の裝飾法は、東方人の嗜好によつて發達したもので六朝風の壯麗さを凌駕するものと思ふ。

七

鳥居博士も關野先生も高句麗の調査には常に馬鞍によつて馳驅されたのである。大正七年の黑板博士の調査の時も又同様で、而かも通溝は匪賊の包圍に陥るといふ状態であつた。昭和十年に筆者が濱田博士に隨從して初めて通溝を訪ふた時は、清川江の上流熙川まで新設の汽車に乗り其先は自動車を雇つての二日ばかりの旅であつた。昭和十二年には滿浦鎮まで汽車の開通を見て一日にして到達し、十五年には平壤から輯安驛に直通して昔の高句麗の兩都は鐵路によつて結ばれることとなつた。洵に險崖僅に單騎を通ずるのみの禿魯江・清川江をつなぐ唯一條の道は、豹人の鐵騎の奔馳した樞要道路であり、或は戰國末の亂を避けた漢人が燕人が先進文化を負ふて來た唯一の道であつたらう。春の山櫻と躑躅に彩られた

此道を秋の燃ゆる様な紅葉の崖下を筆者も幾度通つたことか。文明の恩恵は此無人の境に田畑を開き人烟山々に満ち、はては輯安から數時間にして飛機は奉天安東に至り、梅輯線は一夜にして新京に達するに至つた。そして秘められた高句麗の歴史と文化とが漸くにして世に紹介されようとした矢先、敗戦のいたましい夢によつて再び總ては千六百年の昔に還つて行つた。學問に國境はなくとも私達の憧憬が高句麗の古文化を求めることは十年二十年にはありさうもない。ましてや三十八度の緯度線は完全に高句麗を隔離し

てしまつた。平壤から馬背に十日を要した關野博士の頃さへもなつかしい。滿洲から新義州までハイヤーによつて鴨綠江岸を長驅した昭和十年の頃は、東亞の考古學界も惠まれた華やかな時であつた。高句麗人の天降説を天孫降臨の古傳に比較して滿洲の要人に苦い顔をされたり、高句麗祭に日鮮滿の男女が相共に和樂したあの頃を考へて、高句麗人の自由な幸福な世界が昔の其國に來たかに考へたのも、今は全く夢となり空想と成つてしまつた。

——三二・一〇・一——

中國民俗學研究の近況

直 江 廣 治

中國民俗學研究の展開については別に詳細なる報告を用意してゐるので、ここでは昭和十六年六月私が北京に赴任してから、二十一年六月歸國するまで足掛け六年間の主として彼の地に於ける民俗學研究の動向の大略を紹介するに止めたいと思ふ。

民國初年以來中國に於ける新文化運動の中心であり、同時に又民俗學運動の母胎ともなつた嘗ての國立北京大學も、事變の勃發によつて教授學生の大分部が南方に移り、當時存在してゐるのは同名ではあるが、全く内容の一變した北京大學であつた。其他北京の著名な大學であつた國立清華大學や中法大學、或ひは天津の國立南開大

學も南方に去つてゐたし、昭和十六年末大東亞戰爭の勃發を機に、アメリカのハーバード大學の分校であつて燕京大學も遂に閉鎖されるに至つた。北京に止つた大學としては北京大學、師範大學、輔仁大學、中國大學の四つがあつたが、教授の顔觸れには大きな變動があつた。又各種の集會は日本憲兵隊の極度な監視下に置かれ、従つて民俗學會とは限らず全ての中國側の學會活動は長い冬眠状態に入つてゐた。かうした状態は北京だけに限らず、所謂當時の和平地區に共通した現象であつた。民俗學研究の第二の中心地として、顧頡剛、容肇祖、鍾敬文氏等の指導の下に「民俗週刊」を百二十